

が、百濟記は日本をさして貴国と称している点からも知れるように、それは聖明王の戦死、任那諸国の滅亡、敏達・推古朝の任那復興計画と時勢の推移する時点において、百濟が加羅問題を中心に日本との特殊関係を意識して撰述したものであり、百濟本記もそれについて同様な傾向をもつもので、撰述時期は百濟記は欽明——推古の間、本記は推古朝を余り遠く隔らぬ時期というのがその要点。この結論には先に博士の指導をえて発表された木下礼仁氏の「日本書紀にみえる百濟史料の史料的价值について」(『朝鮮学報』二一・二二)なる百濟記以下の三書の借音字の統計的研究が有力な傍証とされている。

他の諸氏の論考についてはすべてにわたつて述べる余裕をもたないので、古代史に関するものだけを簡単に紹介しておこう。小林博士の論考は石上神宮伝存の鉄盾の製作年代とそれが日本製か朝鮮製かの問題を慎重に論じたもので、「仁徳紀にいう高麗国貢獻の鉄盾そのものであると断定する気はないが、これが五世紀ごろに製作されたものであり、古代において異国の工人の製品であると語り伝えられた可能性を、まったく否定することはで

きない」と結ばれている。村上氏のは新羅の王都制について論じたもので、その六部は高句麗や百濟が王都に五部制を施行したことの影響をうけて、六世紀に入つて間もなく施行されたものであろうことなどが述べられている。井上氏のは三国史記地理志にみえる地名語尾の用字から、それぞれの分布によつて高句麗・百濟および新羅・加耶の文化境域を推定しようという詳細有益な基礎的研究で、その分布図と新羅統一時代の郡県図が挿入されている。笠井氏のは三国遺事の百濟王曆に三国史記と異なる異伝史料のあることに注意し、それは決して錯誤ではなく、「正史編纂のまゝに埋もれ去らんとした、貴重な古代伝承である」として、この点から継体・欽明兩紀にみえる重出記事(仏教公伝年次・多沙津割讓年次・継体崩年次など)がすべて明快に解釈できるとした書紀成立の問題にも及んだ重要な提言を含む論考。最後に上田氏のものは書紀にみえる朝鮮派遣氏族を整理し、それについて要説したもので、将来深化する必要がある問題として興味深い。

博士の還曆を記念しては、さらに最近博士の高著「日本書紀日韓關係記事考証」の上巻

が出版されたが、これらが契機となつて博士の念願とされる朝鮮研究が一段と飛躍することを期待し、また博士が長寿を保たれていつまでも斯学のため御活躍されるよう祈念する次第である。

(A5判二三三頁 昭和三十七年七月 朝鮮学会発行 非売品) (岸 俊男)

## 加 計 町 史

広島県山県郡加計町は、太田川の上流丁川と滝山川の合流点に位置し、現在は国鉄可部線の終点にあたり、古来より安芸北部の中心地として発達し、近世では、「隅屋鉄山松巻」が象徴するように、砂鉄精錬の中心地として著名である。この加計町の町史が、小倉豊文広島大学教授を監修・調整者とする、有元正雄・栗栖義典・佐々木盛房・末田尚・武井博明・土井作治・西村嘉助・畑中誠治・松岡久人・道重哲男・脇坂昭夫・渡辺則文各氏スタッフの前後十年にわたる苦心を経て、町史上・下二冊、同資料上・下二冊、合せて三二百余頁に及ぶ大冊となつてこのほど上梓された。本書を一読して何よりもまず敬服するの

は近世の龐大な各種資料を實に綿密に調査され活用されていることである。町史上巻全七一〇頁は序説加計町の地理から近世末までであてているが、原始——戦国末までを思いきつて縮小し、そのうち六五〇頁までが近世の叙述にあてられている。つまり龐大な近世史料に真正面からとりくみ実に綿密・丹念な地方史を描きあげられているのである。すなわち「政治と財政」の章では、近世村落の成立からはじめて広島藩の地方統治、村役人の問題、貢租の問題に及び、「社会と生活」の章では、階層構成とその分化から、人口の変遷、さらに「生活組織」として村の諸行事、年中行事、人間の一生、社会結合に及び、災害と対策に論及する。中でも庄巻は「産業と経済」の章である。ここでは農業、林業、鉱業、農村加工・醸造、水産業、交通運輸の発達、商業と金融の項目にわたつて、実に三四〇頁をさいている。そのうち、問題の隅屋の鉄山経営については、経営規模の推移と、砂鉄精錬にはつきものの木炭使用をめぐる農民との関係に焦点を合せて、多くの統計表を援用して豊富な資料を要領よく整理されている。隅屋の問題は、さらに交通運輸の項でも輸送に關して触れ、商業金融の項でも、資金の運用に關して触れられている。欲をいえば、「中国地方百数十人の鉄山経営者中最大のもの」

である隅屋の鉄山経営を、もつと多方面から深く追究してほしかつたところであるし、第一〇〇表隅屋鉄山仕切先推移表としてまとめられている、製品の全面的な販売流通の問題、また製鉄技術の問題など、さらに深いところみがあれば、より豊かな問題提起になり得たかと惜しまれるが、もとより全体の構成からすれば隅屋——鉄山経営の問題にさまで集中することは許されないことであらう。この例のように、近世篇に多大の頁をさきながら、それは豊富な史料に真正面からとりくみそしてそれを圧縮して叙述されているのであつて、政治・経済・文化全体にわたつて、豊富な問題が提起されているのである。それは町史下巻近代篇にも、もとより共通する。ただ下巻は「町史」よりは、より「町誌」的要素にかたむきすぎているきらいはあるが、最後に結語として加計町の現状を分析する一章をもうけるまで、まことに周到な配慮である。次に、以上に用いられた資料の抜粋が、上下二巻にまとめられている。「文献資料」は、土地関係・貢租・支配関係・村関係・河川交通関係・産業関係・村経済と加計市関係・文化関係に章別整理され、「伝承資料」として民謡(曲譜つき)方言・伝説・俗信が収載され、さらに寛永十九年から昭和三十四年にいたる米価表以下各種統計が、添えられ

ている。これら資料は、いわゆる一件文書よりは一点で数十頁に達する検地帳・産物差出帖以下の冊子類を煩をいとわず収載されていることに特色があり、それだけに学界を益するところ絶大なものがあろう。敢て難をいえば、各所蔵者がその屋号を示されるにとどまり、所在地、また所蔵者別所蔵文書の概要など、整理のほしかつたところで、これは然るべき機会に公表されることを要望しておきたい。広島県は、かねてより地方史研究のさかんなところではあるが、本書によつて、芸北地方史の決定版が打出されたといえよう。この蕪雜な紹介が、かえつて本書の真価をそこなうことをおそれるが、本書をこまでまとめあげられたスタッフ一同のご苦労に深く敬意を表したい。とともに、編集予定期間を二倍に延長されたという町当局の理解ある態度も特筆するべきであらう。

(町史上巻 A5判七一〇頁 昭和三十六年三月刊 町史下巻 同七〇四頁 昭和三十六年九月刊 資料上巻 同八六九頁 昭和三十六年十一月刊 資料下巻 同九四九頁 昭和三十七年五月刊 何れも加計町役場発行)

奈良県政七十年史

奈良県七十年の歩みを記念した『奈良県政